

県指定史跡

国学・首里聖廟石垣

●指定年月日／1993(平成5)年6月11日



この石垣は、琉球国時代の最高学府である国学とそれに付設した聖廟（孔子廟）の西側石垣の一部で、龍潭の南東側池畔に位置します。国学が1801（尚温7）年に、首里聖廟が1837（尚育3）年に現在の地に建てられたことが琉球の歴史書*『球陽』に記されています。

石垣は、表と裏が相方積み（P57）で長さ約56m、高さは表側（龍潭側）で約3m、裏側の最頂部まで約1m、表側勾配は約75度、上部の幅は0.5mです。構造的には20cm大の琉球石灰岩で、最頂部を丸く仕上げ、石垣の表側上半分（約0.5m）の表面を漆喰で塗り固めています。

石垣の前面の広場は、琉球国時代に冊封使を歓待するために催された「重陽の宴」の宴席が設置された場所でもあります。



相方積みの石垣



DATA

所在地：那覇市首里当蔵町1丁目

注意事項：遺跡は見学できますが、沖縄県立芸術大学の敷地内にあります。見学の際は周囲に配慮しましょう。

登録記念物

沖縄県鉄道与那原駅跡

●登録年月日 / 2017(平成29)年10月13日



(写真:与那原町教育委員会提供)



柱の跡



戦後すぐの建物(写真:那覇市歴史博物館提供)

沖縄県鉄道与那原駅跡は、沖縄本島南部の東海岸に位置する与那原町に所在します。

沖縄県鉄道とは、大正から沖縄戦が始まるまで沖縄県が本島中南部で経営していた鉄道で、沖縄県営鉄道とも言い、762mm(2フィート6インチ)の軌間を採用した軽便鉄道です。沖縄では「ケービン」と呼ばれ、親しまれました。与那原線や嘉手納線、糸満線の三路線からなり、那覇と与那原を結ぶ与那原線は三路線の中で最も早い1914

(大正3)年に開業しました。当初の駅舎は木造平屋建てでしたが、1931(昭和6)年に県営鉄道では唯一の鉄筋コンクリート造平屋建てに建て替えられました。しかし駅舎は沖縄戦で被害を受け、戦後は何度か補修されて与那原町役場などとして利用されました。

2015(平成27)年に与那原町立軽便与那原駅舎展示資料館として駅舎が復元され、駅舎の柱の保存と公開などの措置が取られました。また、レールやレールを固定する犬釘などの線路*遺構も見つかっています。レールの位置は、元の位置からずれてはいるものの、犬釘や枕木の位置は、ほぼ戦前の利用当時のままであると考えられています。

このように近代沖縄における鉄道を中心とした交通の歴史を知る上で、意義深い遺跡です。



DATA

所在地:与那原町与那原島ノ前原



せい ふあ う たき

齋場御嶽

国指定史跡

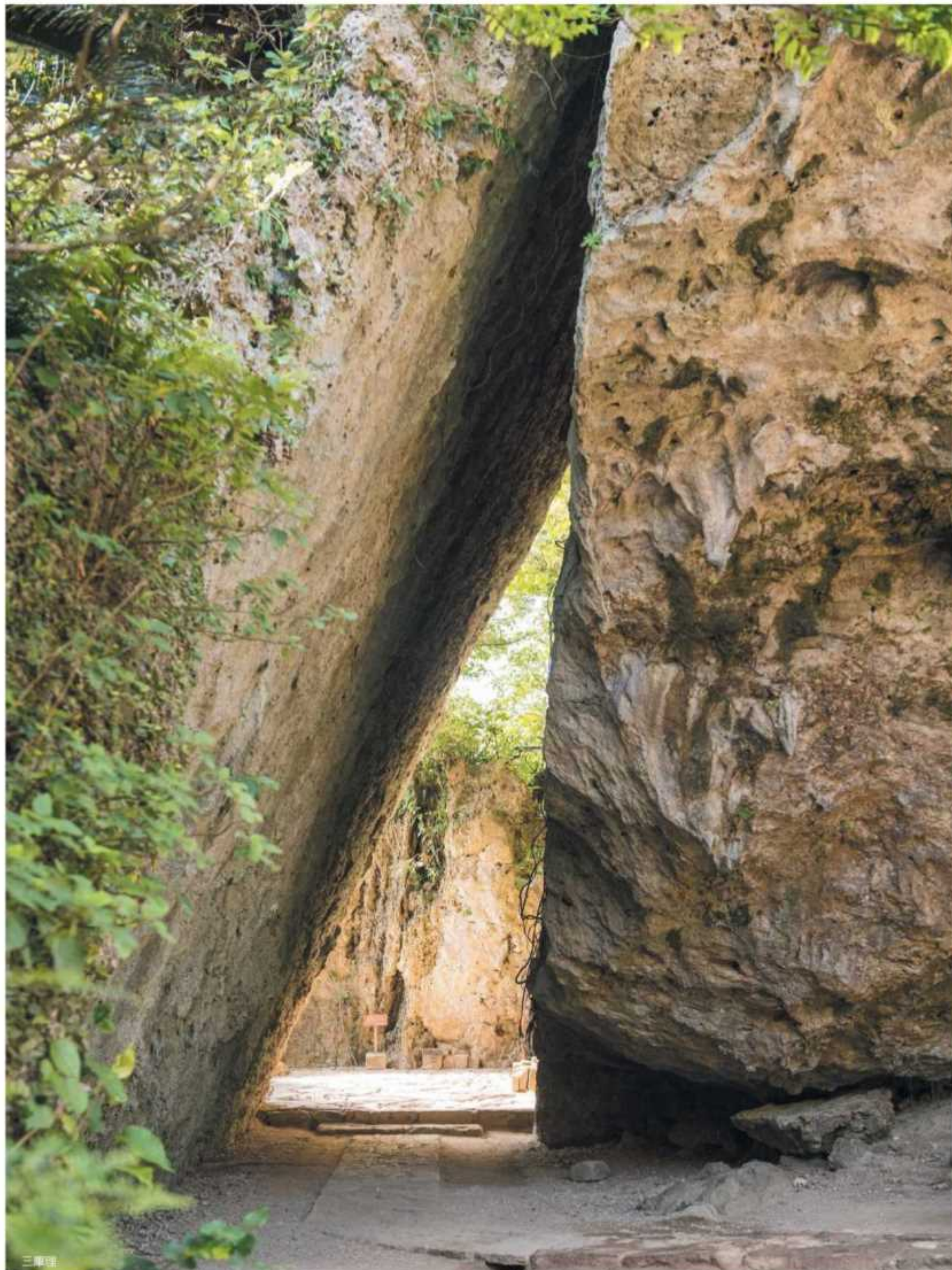
県指定名勝

●世界遺産登録年月日／2000(平成12)年12月2日 ●指定年月日／1972(昭和47)年5月15日(史跡)

世界遺産

国史跡

県名勝



三車守

●指定年月日／1955(昭和30)年1月25日(名勝)

世界
遺産

国
史
跡

県
名
勝



皇始人皇御代(左手前)
シキヨクヨリアマノガスビヒトアマノヨリノカスビヒト(右奥)



寄満



石畳道

沖縄随一の聖地として知られている「斎場御嶽」は、琉球の始祖アマミク（アマミキヨ）がつくった国初めの七つの御嶽の内の一つとされ、琉球国の宗教的儀礼や自然信仰の場所とされています。国王も何度も訪れたほか、神女の最高位にある*^{きこ天}聞得大君の就任式である「御新下り」もここで行われました。御新下りでは、^{おあうお}聞得大君自らが、下級神官である君やノロを伴って昼夜籠もって就任に関するさまざまな儀礼を行います。

御嶽内には、首里城と関係があることを思わせる「大庫裡」や「寄満」など六つの拝所があり、それぞれ^{きこ天}聞得大君の就任式の重要な場所でした。その中でも、切

り立った断崖の向こうに開いた三角形の空間（^{さんぐーい}三庫理）は、特に重要な拝所です。1999（平成11）年には、三庫理で金製の*^{まがたま}勾玉が出土しています。

聖域内は靈地にふさわしく樹木が鬱蒼とし、^{じゅもく うっそう}幽玄な^{ゆうげん}雰囲気

を漂わせています。古くは男子禁制の聖域でしたが、現在では、男女を問わず多くの人々が^{さんばい}参拝に訪れています。人工物がほとんどみられない斎場御嶽ですが、琉球地方に確立された独自の自然観に基づく信仰形態を表す顕著な文化遺産であることから、2000（平成12）年12月に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されました。

DATA

- 所在地：南城市知念字久手堅サヤ八原
- 開園時間：3月～10月：9時～18時(最終入館：17時30分)
11月～2月：9時～17時30分(最終入館：17時)
- 定休日：旧暦5月1日～3日 旧暦10月1日～3日
※旧暦のため毎年変動する
- 利用料金：大人 300円 小・中学生 150円
※20名以上で団体料金(200円)適用

(2018年3月現在)



知念城跡

●指定年月日／1972(昭和47)年5月15日



知念城跡は、沖縄本島南部の東端知念半島の丘陵上ちねんはんじまにあり、東西に連なる古城、新城と呼ばれる二つの*郭クワクからなる*連郭式れんかくしきのグスクです。古城部分は、岩山に高さ1.5～2mの野面積みのづらづ (P56) の石垣をめぐらし、その西側の平地部に新城部分がつながっています。一方、新城部分は、切り石を用いた相方積みあいかたづ (P57) の石垣をめぐらし、二つの*アーチ門があります。城が造られた年代は不明ですが、古謡集*「おもろさうし」巻19に古城部分と

考えられる〈ちねんもりぐすく〉が謡われており、古い時代のグスクと考えられています。

また、城内には、友利御嶽ともりウタキがあり、琉球国王や神女の最高位にある*聞得大君の*〈東御廻り〉の拝所の一つであったと伝えられています。



城壁の内側より

DATA

所在地：南城市知念字知念上知念田原、同クルク原

糸数城跡

●指定年月日 / 1972(昭和47)年5月15日



糸数城跡は、南城市の西側の断崖^{だんがい}上に築かれた大型の
*城塞^{じょうさい}型の古城で、面積は21,000m²を超えます。築城
年代は不明ですが、伝説によると、玉城^{たまぐすく}*按司^{あじ}が二男を大
城按司に、三男を糸数按司に任じたということから、おそ
らく*三山時代初期の14世紀前半だと考えられます。

城壁^{めづらぶ}は野面積み^{みのづみ}と布積み^{ぬづみ} (P56) の両方の石積み技法が
用いられ、東側の平地部分では、高さ3~8mの石積みを
南から北方向に積み上げています。西側部分は、自然の

断崖を巧みに利用して高さ約1mの野面積みの石積みをめ
ぐらしています。布積みの部分が最も高く、この上に立
つと四方をよく見渡すことができます。また、正門は東側
にあり、門の形式は上に檜^ひがのる*檜門^{ひもん}であったようです
が、現在は石門のみが残っています。

沖縄戦で一部破壊されましたが、石垣^{いこう}の積み方や*遺構
の大部分が残っています。



DATA

所在地：南城市玉城字糸数竹之口原、同屋敷原

玉城城跡

●指定年月日／1987(昭和62)年8月21日



玉城城の興亡はよく分かっていませんが、伝承によれば琉球の始祖アマミク(アマミキヨ)が城を築き、代々の城主は天孫氏であったといわれています。14世紀初めの頃には英祖王統の玉城王子の居城となりましたが、王子が王位を継承し第四代玉城王となり浦添城へ移ると、弟を玉城城主にして城を守らせ、大規模な城の改修を行ったと史書には記されています。以後、玉城一帯を治める玉城^{あじ}按司の本拠地として栄え、最盛期には玉城一帯の西側の地域

の守りとして次男を大城按司、三男を糸数按司に任じて、それぞれの地域で城を築かせたと伝えられています。

琉球国時代の史料によると、国王や^{きこえ おおきみ}聞得大君が隔年に一度、3～4月の祭祀に参詣し、また雨乞いの祈願には国王が参詣する慣わしでした。

沖縄戦でその多くは破壊されましたが、一の^{かく(くるわ)}郭は戦火を免れ、現在でも自然の石灰岩を切り抜いて造った入り口や状態の良い石垣が残っています。また、城内には居住跡と思われる場所や拝所が数箇所あり、現在でも^{アガン}東ウマエイ御廻りの拝所の一つにもなっています。

このように玉城城跡はグスクの発生や性格、琉球国時代の祭祀との関わりを考える上で、大切な遺跡です。



城内の城壁



DATA

所在地：南城市玉城字玉城門原、同伊佐昆原

国指定史跡

島添大里城跡

●指定年月日 / 2012(平成24)年1月24日



島添大里城跡は、*三山時代の島添大里^{あじ}按司の拠点として、また尚巴志による三山統一の拠点となったとされる歴史的な*グスク時代の城跡です。南城市の標高約150mの舌状に伸びる琉球石灰岩丘陵^{きゅうりゅう}の東端に位置し、崖を背後に堅固な城壁と天然の地形を巧みに取り入れた造りとなっています。三山時代は島添大里按司^{きよじょう}の居城として、本島島尻地域の東半分を支配する拠点でした。15世紀の初め、尚巴志によって攻略され、落城した後は尚巴志

による三山統一の拠点となり、首里城へ本拠が移転した後は、離宮として使用されました。

発掘調査の結果、城の規模は、南北約210m、東西約270mで、二重の城壁が存在したことが分かりました。^{ないかく}*内郭を囲む高さ約6m、長さ約175mの城壁が残っており、^{がいかく}*外郭部分の石積みは城跡の西側と北東側に残り、当時の南山域では最大規模を誇りました。また、^{きだん}*基壇の上に造られた礎石建物の正殿の^{いこう}*遺構が残っている他、中国産^{ちゅうりく}*陶磁器や金属製品（鉄器・青銅製品）、^{てうしやくりん}装飾品などが出土しています。



DATA

所在地：南城市大里字大里真手川原



佐敷城跡

●指定年月日／2013(平成25)年10月17日



佐敷城跡は、伝承によると15世紀前半に三山を統一して琉球国を樹立した尚思紹・尚巴志親子の居城であったとされています。琉球の歴史書*『中山世鑑』によると、尚巴志は佐敷*按司尚思紹の嫡子で、1372(洪武5)年に誕生し、1402(建文4)年に父親の跡を継いで佐敷按司になったとあります。

グスクの成り立ちは12世紀頃で、13世紀には拡張し、14世紀に周辺の丘陵などを範囲に取り込んで防御を強化



DATA

所在地：南城市佐敷字佐敷島之原

し、最盛期を迎えました。発掘では中国産*陶磁器や土器、金属製品などが出土しており、活発に交易を行っていたことがうかがえます。

尚巴志が、1402年に島添大里按司を倒してからその拠点を島添大里城(P97)に移したと伝えられており、その後は*東御廻りのルートとして祭祀儀礼の場として利用されました。



城跡より佐敷地区を望む

県指定史跡

さ しき
佐敷ようどれ

●指定年月日 / 1958(昭和33)年1月17日



佐敷ようどれは南城市佐敷にあって、1429(宣徳4)年に南山を滅ぼして三山を統一した尚巴志の父の尚思紹とその家族を葬った墓だといわれており、「ようどれ」とは永遠に静かな所という意味です。

尚思紹は、伊是名城から佐敷に移った佐銘川(鮫川)大主と馬天ノロ(大城按司の娘)の子どもといわれており、成長して苗代に移り、「苗代の大親」と称しました。

墓の規模は、門口およそ3m、奥行2.6m、軒高2mで、

構造は屋根は半円形になっており、駕籠型に近い独特の形をしています。

墓は、最初は佐敷南方の断崖に接して横穴を掘り抜いていましたが、風雨による自然崩落に耐えられなかったため、1764(乾隆29)年に現在の場所に移されました。



墓の正面より

DATA

所在地：南城市佐敷字佐敷仲上原

注意事項：自衛隊の駐屯地内にあるため、一般公開されていません。

垣花城跡

●指定年月日／1961(昭和36)年6月15日



垣花城跡は、南城市にある*グスク時代の遺跡です。

遺跡は垣花集落南側にある標高約120mの琉球石灰岩の丘陵上に立地し、城跡の東南側は5～6mの崖となっています。

築城年代は、記録や伝承などがなく不明確ですが、14世紀頃から*三山時代まで長期間にわたって使用されたと推定されます。

城壁の幅は60～150cmほどで、垂直に近い野面積



DATA

所在地：南城市玉城字垣花和名盤

み (P56) で、南側と北側にある物見台は布積み (P56) になっています。

城跡の構造は一の*郭と二の郭からなる*連郭式です。城門はそれぞれの郭に設けられ、その向きは一の郭が北東側、二の郭が東側になっています。城内の一の郭には拝所があり、*按司墓の神名「アフィハテルツカサノ御イベ」が祀られています。

これまでに発掘調査は行われていませんが、城跡からグスク系土器や中国産*陶磁器、カムイヤキなどが表面採集されています。



県指定史跡

ミントングスク

●指定年月日 / 1977(昭和52)年1月10日



ミントングスクは弥生時代、*グスク時代の遺跡です。遺跡は琉球石灰岩からなる高さ約115 mの独立丘とその周辺の斜面地に立地しています。方言ではミントウグスクといい、「明東」または「免武登能」の字をあてています。他にもミントウアマウリとも言います。グスク内から弥生時代前半の櫛目の文様の入った土器や綺麗に加工された*石斧などの生活用具が採集されています。



DATA

所在地：南城市玉城字仲村渠後根

注意事項：見学はできますが、個人の宅地内にあります。見学の際は周囲に配慮しましょう。

伝承では、アマミク（アマミキョ）がウフアグリジマから浜川御嶽のヤハラヅカサの岩礁に上陸し、丘陵地に築いた居城とも伝わっています。また、グスクの頂上付近の岩陰や小さな洞穴は「神様の墓」と呼ばれる拝所があり、古くから信仰の対象になっている由緒ある御嶽として知られています。文献資料などには琉球国及び神女の最高位にある*聞得大君の*東御廻り参詣場所の一つでもあったと記されています。

このようにグスクの発生や性格を知るうえで、貴重な遺跡です。



具志川城跡

●指定年月日／1972(昭和47)年5月15日



具志川城跡は、三方を海に囲まれ、波で削られた標高17mの垂直な崖（海食崖）の上に築かれています。雄大な太平洋を眺望できる場所にあります。城内には「ヒーフチミー（火吹き穴）」と呼ばれる自然穴があって海に通じています。

伝承によると「久米島の具志川城主であった真金声*按司が、同島の伊敷索按司の二男真仁古樽按司に攻められて落城し、城を脱出して沖縄本島のこの地に逃

れ、故郷と同じ名の城を築いた」といわれています。

具志川城跡がある喜屋武地域には、喜屋武古グスク、当間グスク、上里グスク、山城グスクなど九つのグスクが分布し、うち上里・山里など五つのグスクが一つの丘陵上に立地しています。その中でも最大規模の縄張りを持つのが上里グスクであり、同グスクを中心に各グスクが配置されていることから、具志川城跡についても独立した「グスク」ではなく、上里・山城グスクを中心とした一連のグスクの一つだと思われます。



DATA

所在地：糸満市宇喜屋武具志川原、同カネク原



国指定名勝

き や ん かい がん およ であ さき かい がん

喜屋武海岸及び荒崎海岸

●指定年月日／2012(平成24)年9月19日

国
名
勝

喜屋武海岸及び荒崎海岸は、沖縄本島最南端に位置します。荒崎海岸では波の穏やかな晴れた日には、海の色やダイナミックな地形を楽しむことができますが、悪天候の時には大変危険な場所で、台風によって一度に巨岩が3つも打ち上げられた古い記録が残っています。また、カサカンジャーと呼ばれる琉球石灰岩の巨岩もあり、御嶽として地域の人々に信仰されています。激しい波のためか、無鼻（「ハナフギ」「ハナモウ」）と悪口を叫ぶと海が荒れ、

雷のような音が響くという波那普儀伊部の伝承があります。また、戦後地域の人々が海岸地帯の植生復興に取り組んだ場所でもあります。

一方、断崖が連なる喜屋武海岸の巨岩群の中には、黄金岩（カタハラグスク）と呼ばれる大岩があり、倭寇が岩の凹部に財宝を隠したとの言い伝えがあります。

このように、喜屋武海岸及び荒崎海岸は独特の地質・植生があじわいのある海岸を形成し、また伝承の残る地や信仰の地でもあります。



DATA

所在地：糸満市宇喜屋武真志川原、大石原、字束里下兼本原、荒崎原

米須貝塚

●指定年月日／1956(昭和31)年10月19日



米須貝塚は弥生時代中期の遺跡で、1954(昭和29)年6月30日に多和田真淳によって発見された遺跡です。別名、米須浜貝塚とも呼ばれています。

遺跡は米須集落の南側約800mの離れた場所にあり、米須浜と呼ばれる標高約12mの海岸砂丘地に立地しています。付近の海岸には、地元で潮川と呼ばれる湧水があります。

遺跡は1983(昭和58)年3月の採砂工事で大規模な

破壊を受け、遺物回収とともに翌1984(昭和59)年に範囲確認調査が行われています。見つかった遺物には鉢形、甕形、壺形などの土器や、石皿、*石斧などの石器、貝錘、貝札などの*貝製品、文様のある土製品、多量の貝類や獣魚骨などがあります。

特に、アンボンクロザメガイを素材とする貝札は鹿児島県種子島広田遺跡から出土したものに類似しており、土製品も貝札の文様を模したと思われるものがあります。



DATA

所在地：糸満市手米須



潮川と貝塚

具志川城跡

●指定年月日 / 1975(昭和50)年12月10日



具志川城跡は、真達勃*按司により15世紀頃に築城されたと推定されているグスクで、久米島の北西海岸に位置しています。海岸に面した三面は断崖に囲まれ、石灰岩と安山岩で積まれた独特な石積みいにしえハが、古の時を経て現在も残っています。

当時の栄華は古謡「おもろ」にも謡われています。伝承では「二代目具志川城主ちやくなん マカネクイ（嫡男の真金声按司）の時、伊敷索按司の次男真仁古樽チナハ マニクタルにより城を攻め奪われ、真金

声按司は沖縄本島糸満の喜屋武岬で同名の具志川城を築城した」と伝えられています。また、城を奪った真仁古樽は具志川按司を名のり、父の伊敷索按司や兄の中城按司と共に一族で久米島を支配しますが、16世紀の初頭、尚真王により一族ともに攻め滅ぼされ、久米島の按司時代は終わったと*『久米具志川間切旧記』や*『琉球国由来記』には記されています。



DATA

所在地：久米島町字仲村渠クメシ原

う え ぐすく じょう せき

宇江城城跡

国指定史跡

●指定年月日／2009(平成21)年7月23日



宇江城城跡の築城年代は記録が残っておらず、不明ですが、近世の*『久米具志川間切旧記』などによれば、伊ナハ^{ナハ}あじ^{あじ}の長男である久米中城^{くめなかですく}按司が築いたとされ、1510(弘治5)年頃に琉球統一の過程で第二尚氏尚真王に滅ぼされたといわれています。城壁の石積みには、一のかく(くわ)の通用門(虎口)部分周辺にのみにサンゴ石灰岩の切石が見られる他は、城跡の所在する丘陵^{きやうりやう}周辺で採取できる板状^{あんざんがん}の安山岩が使用されています。二の郭および

三の郭の石積みは戦後、米軍の基地建設により破壊されましたが、一の郭から二の郭にかけて城壁の基礎部分の根石(城壁の基礎となる石)の保存状態が良好であり、*三山時代から琉球国時代へのグスクの変遷^{へんせん}を知る上で重要な城跡であることが確認されました。一の郭は比較的残存状態が良好で、なかでも北西隅は保存状態が極めて良く、2m前後の高さの石積みが残っています。



DATA

所在地：久米島町宇江城山田原



県指定史跡

仲里間切蔵元跡

●指定年月日 / 1956(昭和31)年2月22日



久米島にある仲里間切蔵元跡は琉球国時代の役所の跡で、創建年は不明ですが、竹富島の蔵元の創建（1524年）後に建てられたと考えられています。

蔵元は地元でウクラまたはウングワと呼ばれ、漢字で書けば共に「御蔵」と表記されます。最後の蔵元は1739（乾隆4）年の喜久村梨賢が地頭職の時代に建てられ、約180m²の総檜材の瓦葺で堂々たる建物であったといわれています。現在残っている石垣は1763（乾隆28）年に

宇根親雲上梨時の地頭職の時代に築かれたと考えられています。

蔵元跡の面積は約1,750m²で、周囲の石垣は琉球石灰岩で造られ、高さは北側が約3.3m、南側が約2.7mです。北と西には*アーチ門があり、南側の正門には四脚の屋根（屋根付きの門）があったと思われる礎盤の跡が残っています。また、敷地の東南一角に丘があり、土で造った物見台の跡といわれています。

廃藩置県後は村役場となり、その後、小学校として利用された時期もあります。仲里間切蔵元は、首里王府が久米島をどのように支配したかを知る上で重要な遺跡です。



DATA

所在地：久米島町字真謝



県指定史跡

久米島大原貝塚

●指定年月日／1956(昭和31)年10月19日



久米島大原貝塚は、縄文時代後・晩期、弥生時代中期の複合遺跡で、1955(昭和30)年6月16日に多和田真淳によって発見された遺跡です。

遺跡は、久米島の南西海岸に位置する標高9～10mの大原砂丘地に立地しており、場所によって時期や性格などが異なり、3地点に区分されます。第1地点は縄文後期の貝塚で県史跡の指定地となっており、伊波式土器(P42)や荻堂式土器(P58)、*大山式土器などが見つっています。

第2地点は第1地点の西側一帯に広がる縄文後・晩期の遺跡で、伊波式土器や*カヤウチパンタ式土器、宇佐浜式土器(P14)や、ゴホウラ製貝輪やスিজガイ製利器などの*貝製品、*石斧や石皿などの石器、人骨、石囲いの*遺構などが見つっています。また、包含層の中から人骨が多く検出されています。第3地点は県史跡指定地の西方にあり、大原第二貝塚と呼ばれる弥生時代中期の貝塚で、柱穴、土器、貝製品などが見つっています。



DATA

所在地：久米島町字大原清水原



伊敷索城跡

●指定年月日 / 1961(昭和36)年6月15日



伊敷索城跡は*グスク時代の遺跡で、嘉手苺集落の北西に位置し、久米島の中央部を流れる白瀬川河口近くの標高約 20 m の琉球石灰岩の丘陵に立地しています。地形的に白瀬川に面した北西側は断崖が続き、南東側は穏やかな傾斜になっています。グスクは野面積み (P56) で、白瀬川に沿った崖を背後に、東西に細長く伸び、長方形になっている*連郭式です。伊敷索*按司の居城と伝えられ、チナハグスクとも呼ばれています。

グスク内は東側の*郭と西側の郭に分けられ、内部は東側が全体の四分の一ほどの広さで区切られ、城門は西側の郭に東南方向に向けて設けられています。

東の郭には*『琉球国由来記』にも記述があるイシキナハ御嶽があります。グスクの築城年代は不明ですが、伝承では伊敷索按司が久米島全体を統治した際に築城し、子孫を宇江城や具志川、登武那覇の各グスクに配し、久米島における支配権を握ったと伝えられています。



DATA

所在地：久米島町字嘉手苺西新田

ウティダ石^{いし}

●指定年月日／1974(昭和49)年1月17日



ウティダ石は、比屋定集落東端の松林の中にある巨岩で、今から約500年前の尚真王時代に、久米島仲里^ま間切の堂之比屋^{ひや}という人が日の出を観測した石と伝えられています。太陽石と書き、地元ではウティダ石やウティダウガミイシと呼ばれ、その上面に数本の線が刻まれ、太陽の動きを測る目印となっています。

一年中で最も昼の長い夏至の頃の日の出を栗国島の真上、最も昼の短い冬至の日の出を慶良間の久場島の上に

位置付け、両島の間を移動する日の出の位置を両島間に並ぶ島々を目印に、各季節の移り変わりを捉えています。1カ所に居て観測できる位置は、現在の太陽石の据えられた位置以外にないと考えて観測が行われたと伝えられています。

農事暦のない頃、唯一の独特な観測方法で、日の出位置の移動で季節の変化を捉え、それを簡潔な言葉で広く農民に教え伝えたといわれています。



石に刻まれた目印



石に刻まれた目印

DATA

所在地：久米島町字比屋定下村渠

国指定史跡

北大東島燐鉱山遺跡

●指定年月日 / 2017(平成29)年8月14日



国史跡

北大東島燐鉱山遺跡は、1919(大正8)年から1950(昭和25)年まで、主に化学肥料の原料とされた燐鉱石を採掘した鉱山遺跡で、沖縄本島の東方約360kmの太平洋上に位置する北大東島にあります。

1908(明治41)年に八丈島出身の玉置半右衛門が採掘を試みたのがその始まりで、その後、東洋製糖株式会社や大日本製糖株式会社が採掘を行いました。燐鉱石の積み出し量は、太平洋戦争中の1942(昭和17)年

には最大の7万トン台に達しました。太平洋戦争後、米軍政府により採掘されたこともありましたが、1950年に閉山しました。

現在は、採掘場や燐鉱石を運んだトロッキの軌道、燐鉱石貯蔵庫など、燐鉱石を採掘して乾燥させ、それを運搬・貯蔵して島外へ運び出した施設が大規模に残っています。これほど大規模に燐鉱生産施設が残るのは国内では北大東島のみで、燐鉱採掘産業の歴史を知る上で重要な史跡です。

また、沖縄県内には近代産業に関連する遺跡はあまり残っていないことから、学術的・文化的価値の高いものです。



DATA

所在地：北大東村字港

